全国の園長先生に無料でお届けしています

2018 春 Spring

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

これからの幼児教育

PDF 版では表紙写真を公開しておりません。ご了承ください。

特集

『遊び』の大切さを保護者にいかに伝えるか

東京大学大学院教育学研究科 教授 **秋田喜代美**

東一の江幼稚園（東京都江戸川区・私立）/ **レイモンド南町田保育園**（東京都町田市・私立）/
札幌市立もいわ幼稚園（北海道札幌市・公立）

データ

小学校入学前の生活に関する振り返り調査

ベネッセ教育総合研究所 http://berd.benesse.jp/

これからの幼児教育 2018 春 Spring CONTENTS

2 特集

『遊び』の大切さを保護者にいかに伝えるか

2 ポイント解説
遊びの価値を園内で共有し、保護者に伝え、理解を得るポイント
東京大学大学院教授 秋田喜代美
札幌市立もいわ幼稚園園長 笹山雅司
レイモンド南町田保育園園長 鈴木康人
東一の江幼稚園園長 田澤里喜
ベネッセ教育総合研究所顧問 磯部頼子

6 事例1
遊びを「可視化」し、広がった遊びを多様な手法で保護者に発信 遊び込む環境をともにつくり出す
東一の江幼稚園（東京都江戸川区・私立）

9 事例2
子どもの姿や園の思いをプロセスや背景とともに丁寧に伝えて保育への理解を深める
レイモンド南町田保育園（東京都町田市・私立）

12 事例3
「10の姿」を活用して遊びの中の学びを伝え育ちの見通しを保護者と共有する
札幌市立もいわ幼稚園（北海道札幌市・公立）

15 参考資料
保育参観・保育参加などでご活用ください！ 保護者とのコミュニケーションシート
※ウェブサイトからダウンロードできます

16 データから見る幼児教育

小学校入学前の生活に関する振り返り調査

「これからの幼児教育」ウェブサイトでは
すべての記事を無料でダウンロードできます

◎過去1年間の特集テーマ
2017年 秋号 新要領・指針を生かす！ 次年度計画の検討ステップ
2017年 春号 ニッポンの幼児教育は、どう変わるのか？
2016年 夏号 幼児の非認知能力を育てる保育者を、どう育成する？
※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

http://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/ または ベネッセ　これからの幼児教育 で 検索

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。

「これからの幼児教育」2018年春号
編集発行人／岡田晴奈　発行所／(株)ベネッセコーポレーション　印刷製本／凸版印刷(株)　編集協力／(有)ペンダコ 丹羽三千代　執筆協力／二宮良太
撮影協力／ヤマグチイッキ 荒川 潤 高橋龍次　イラスト協力／アサヌマリカ
◎お問い合わせ先／「これからの幼児教育」お問い合わせ窓口　〒700-8686 岡山市北区南方 3-7-17
0120-926-610（通話料無料）受付時間：9:00 ～ 18:00（土日・祝日・年末年始除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。 ※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、086-214-6301へおかけください（ただし通話料がかかります）。

はじめに

2018年4月、幼稚園教育要領と保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が施行されました。

施行に先立ち、本誌『これからの幼児教育』ではこれまでに

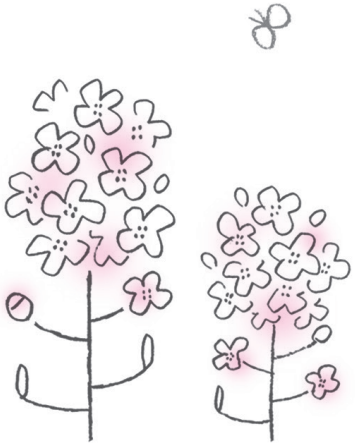
- 新要領・指針の内容と、その改訂・改定のポイントや背景（2017年春号）
- 新要領・指針の視点を園の運営・研修に取り入れるための実践例（2017年秋号）

などをご紹介してまいりました。

本号では、これらの内容を踏まえ、園の運営にお役立ていただけるよう、新要領・指針でも示されている「遊び」の重要性を、保護者の方に伝達・理解していただくための実践例をご紹介しています。今回取材にご協力いただいた幼稚園・保育園の皆様も、忙しい日々や限られた条件・環境の中、各園の歴史を受け止めつつ、さまざまな実践・運営の試行錯誤を積み重ねられていました。

前号では、園の運営にご活用いただける情報をわかりやすくまとめたものにご好評をいただいたため、本号でも、ポイントをまとめた解説、実践例の取り組みポイント、保護者とのコミュニケーションシートなどを掲載しております。お役立ていただければ幸いです。

『これからの幼児教育』編集部



前号を含めたバックナンバーは、インターネット上でご覧いただくことができます。
「ベネッセ　これからの幼児教育」でご検索ください。

http://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/

特集

『遊び』の大切さを保護者にいかに伝えるか

遊びの中には子ども一人ひとりの学びがあり、遊びの質を高めるためには
保育者の工夫と努力が欠かせません。
一方、保護者に対して、園における遊びへの理解を深めてもらうことも難しいものです。
本号では、ポイントを踏まえた解説と3つの事例から、これらの課題を考えます。

ポイント解説

遊びの価値を園内で共有し、保護者に伝え、理解を得るポイント

遊びに対する保育者・保護者の理解を深めるには、次の2つが重要です。

1. 園における遊びへの共通理解を深めること
2. 遊びを通して育てたい力や育ちつつある力を、具体的に保護者に伝えること

そのポイントについて、識者の先生や現場の先生方にお答えいただきました。

POINT 1 園における遊びへの共通理解を深めるには

Q1 遊びの大切さを保護者にもっと伝えたいと思っています。その前提となる、保育者間での、遊びそのものに対する理解や共有自体が難しいと感じています。

秋田先生 保育者に対して、園長先生が「遊びとは」と、かしこまって説明するよりも、日々の保育における活動の価値づけや意味づけをする方が、遊びの大切さが伝わりやすいと思います。

例えば、「こういう遊びは面白いよね」など、発展や類似の事例や園長先生自身の経験とつなげて保育者の実践のよさを認めると、保育者が具体的に遊びの大切さを理解することができて、自信も深まります。もうひと工夫がほしいと思ったときにも、現状を認めた上で、「○○先生はこんなことをしていたよ」「違う素材にしてみてもいいかも」などとレパートリーを広げる声かけをするとよいでしょう。

遊びの場面の映像や写真などを用いて、エピソードを共有する研修も効果的です。ある園では、その日の活動に使ったおもちゃや素材の実物を一部残しておき、お迎えの時などに保護者に触れてもらったりして、活動内容を伝えていました。その場面を見た若い保育者が「こんなふうに遊べばいいのか」と、気づきを得るなど、保育者同士が実践内容を共有するきっかけにもなります。

4月に実施された新要領・指針の基本的な考え方も保育者間で共有しておきましょう。ある園では、保護者に向けて掲示する写真の下に、遊びの意義などについて幼稚園教育要領や保育所保育指針の文言を用いた簡潔な説明を添えていました。これには、保育者間の共通理解を深めるねらいもあるそうです。

もっとも、もともと遊びとはワクワクと心弾むものです。遊びの大切さの理解を深める上で「こうあるべき」という考え方に保育者が縛られ過ぎないよう、十分に配慮してください。

回答者

東京大学大学院
教授
秋田喜代美先生

札幌市立もいわ幼稚園
園長
笹山雅司先生

レイモンド南町田保育園
園長
鈴木康人先生

東一の江幼稚園
園長
田澤里喜先生

ベネッセ教育総合研究所
顧問
磯部賴子先生

磯部先生 遊びを通した学びは、同じ場面でも子ども一人ひとりで、感じ方や気づきは異なります。その違いを保育者が捉えられるようにするために最も効果的なのは、園長先生が「その場」で保育者に伝えることです。一緒に遊びを見ながら、「今、○○ちゃんは、こうしたらもっと面白くなると気づいたね」「この発見はすごいことだよね」など、目の前の場面を通して遊びの大切さやその見取り方を説明するうちに、保育者の遊びを見る視点が磨かれていきます。

遊びについて自然と語り合える風土をつくることも、心がけたいものです。「あの環境構成はよかったね」「○○ちゃんが生き生きしていたね」など、園長先生からよい点を褒める言葉があれば、保育者は自身の思いや考えを話しやすくなるでしょう。

保育者に遊びの本質を捉える力がつき、子どもを見る目が磨かれると、遊びの中の子どもの変化を保護者に伝えたいと思うようになります。子どもの育ちは保育者にとって大きな喜びであり、それを保護者と共有したいという気持ちが自然と高まるからです。

Q2 園内掲示やウェブサイトでの情報発信など、やりたいことは多いのですが、保育者の負担が増えるために踏み切れません。

田澤先生 確かに従来の業務に加える形で増やすと保育者は疲弊します。新たな形態での情報発信の際は、できるだけ既存の情報を活用することで、業務量を増やさないように心がけています。ＩＴ化による負担軽減にも力を注いでおり、保育者には１人１台のパソコンを用意し、各種資料をデータ化するなどして業務を効率化しています。

さらに、園だよりやブログは園長、連絡アプリは副園長などと、担任以外にも負担を分散させています。これにより、異なる立場の視点から保護者に情報を伝えることにもつながっています。

磯部先生 新しい情報発信手段を試すのはよいことですが、「毎日」「週○回」など、最初に高いハードルを設けると、保育者の負担が大きくなります。初めは不定期でスタートし、保護者の反応がよければ定期化するくらいの気持ちで始めるのがよいと思います。保育者の負担が大きくなり過ぎたら、年数回、保護者にしっかりと情報を伝える機会を設けて、その代わり日常の取り組みは簡素化するという考え方があってもよいと思います。

Q3 若手の保育者の中には、遊びの大切さが腑に落ちていないケースが見られます。

笹山先生 最近、「10の姿」をヒントにして、遊びの大切さを捉える園内研修を始めました。各年齢の遊びの事例をもとに、「この遊びを通して、どのような力が育つか」を話し合います。その結

果、遊びが充実するにつれて、「10の姿」が浮かび上がってくることを共有できました。話し合いの結果は保護者にも伝えて、子どもの育ちの共有に生かしています。今後は、教育課程から浮かび上がる「10の姿」を具体的な遊びの中で見いだすことで、保育者のさらなる理解を図りたいと考えています。

鈴木先生 園長の私やリーダー的な保育者が、若手保育者の保育の傍らに寄り添って、「こういうきっかけで自然への興味・関心が生まれてくる」など、本人が無意識で行っていることへの意味づけをするような声かけをしています。また、園内研修では、遊びの場面を撮影した動画をもとに、「この活動はどこまで追求させるべきだったか」「どのような働きかけがふさわしかったか」などを話し合います。保育者の中には、自分自身に遊び込んだ経験が少ない場合もあります。そんな時は子どもとともに遊びを楽しみながら、「遊びってこんなに面白いんだ」と実感してもらうことから始めています。

POINT 2 遊びを通して育てたい力を、具体的に保護者に伝えるには

Q1 遊びを通した育ちは見えにくく、明らかな変容が見られるまでに時間がかかります。その点を保護者に理解してもらうためには、どのように説明するとよいでしょうか。

秋田先生 保護者は我が子の「今」の様子にとらわれがちなので、保育者が、長期の視点から育ちの見通しをもつことが大切です。入園説明会や懇談会などの機会を利用して、子どもの成長について保護者が特に気にしそうなことをわかりやすく説明しましょう。「お友だちと仲よく遊んでほしいと思うかもしれませんが、初めは自分の好きなことを１人で見つけることも大事なんですよ」などと説明すると、安心する保護者も多いはずです。

運動会などの行事も、子どもの成長を長い目で捉えてもらうよい機会です。自分の子ども以外の学年にも目を向けてもらい、「昨年から成長したな」「来年はあんなことができるようになるのだから、今から焦らなくてもよいのだな」などと感じてもらえるとよいですね。

磯部先生 子どもは遊びを通して必要な力を獲得し、それを次の遊びの場で活用することを繰り返します。それが遊びの中で学ぶということです。そうした姿を継続的に保護者に伝えると、我が子が徐々に成長していることへの理解が深まります。「我慢強さが育ってきた」「友だちとのかかわりが増えてきた」など、育ちの芽生えを観察し、それが表れたエピソードを伝えるとよいでしょう。

保護者には「友だちと元気に遊んでいた」など、他者とのかかわりについて伝えることが多くなりがちですが、１人で遊ぶことの大切さも丁寧に説明すると、保護者の子どもを見る目が豊かになっていきます。

Q2 主体的な遊びを大切にしていますが、保護者から「小学校への準備は大丈夫なのか」と聞かれます。どう答えるとよいでしょうか。

秋田先生 園ならではの遊びの魅力を伝える際には、遊びを通してさまざまな力が育っていき、それが小学校以降の基礎としてつながっていくことも具体的に説明すると安心していただけるでしょう。

卒園したきょうだいがいる保護者に、園生活を通してどのような点が成長したと感じるか、それが小学校でどのように役立っているかを懇談会などで話してもらうと、具体的にイメージしやすく効果的です。「この園で遊んでよかった」といった話を聞く中で、「夢中で遊べるのは今の時期だけだな」などと、保護者の理解が深まるはずです。

磯部先生 幼児期は、子ども自身が必要だと感じて学ぶことに意味があります。そうした「必

要感」は、主体的な遊びの中でこそ生まれるものです。逆に、まだ文字や数に興味をもっていない子どもに一斉活動で「あいうえお」を教えると、子どもが苦痛に感じてしまうこともあります。保護者に対し、こうした幼児期の学びの特性をしっかりと説明してほしいと思います。

小学校では、集中して座っていられるだろうかと心配する保護者もいます。しかし、園で座り続ける練習をしたからといって、勉強に集中できるとは限りません。幼児教育で育みたいのはむしろ、遊びにのめり込んで、その子なりの達成感や満足感を味わうことです。それによって次の活動へと気持ちを切り替えることができ、再び何かに集中するなど、小学校で生活する力や学習する力がついていきます。

編集部より　ベネッセ教育総合研究所が行った「園での経験と幼児の成長に関する調査」によると、園で「遊び込む経験」や友だちとの「協同的な活動」を多く経験する方が、子どもの「学びに向かう力」が高いことが明らかになっています。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

園での経験と幼児の成長に関する調査 で 検索

Q3 長年続けてきた行事をやめようと考えていますが、楽しみにしている保護者の声もあり迷っています。

鈴木先生　伝統行事を廃止するのは勇気がいりますが、子どもの育ちに本当に必要かを問い直し、場合によっては廃止や内容の変更を検討しています。本園では、遠足の意味を問い直し、「年間最低1回は、どこかに行く」と緩く計画し、日々の遊びを通して子どもが外の世界に興味をもったタイミングで、子どもが話し合いで決めた場所に出かけています。生活発表会も、発表のジャンルを1つに絞ると一人ひとりの成長を伝えづらいと考え、作品や表現発表、日常の保育動画など、それぞれの子どもが主体的に関わったものを見てもらうEXPO（博覧会）にしました。固定観念にとらわれずに、目の前の子どもにふさわしい行事を考えています。

笹山先生　「こんな力が育ってほしい」という思いがあるからこそ、新しい行事は増えていきますが、園の教育目標と照らし合わせて必要性が弱いと感じられる行事は、保護者に理由を説明した上で廃止することを検討します。

複数の行事を同時に行い、負担を軽減することも心がけています。例えば、保護者と子どもが一緒に歌うコンサートを開くため、発表会や終業式など保護者の集まる機会にしたイベントとしました。大がかりな行事にせずとも、日常的な掲示などでねらいを達成できる場合には、そのようにしています。

Q4 園とかかわりをもつことを好まない、園の活動にあまり関心を見せない保護者には、どのように伝えるとよいでしょうか。

秋田先生　その保護者が消極的な姿勢を見せる背景を理解することから始めましょう。仕事などで多忙な場合は、可能な範囲でかかわってもらい、その方の得意や専門を生かせる配慮などをし、お越し下さったら「よく来てくれましたね」などと温かい声をかけましょう。クラス内の人間関係などの悩みから打ち解けにくい保護者には、個人面談を設定したり、担任ではなく園長先生が「お茶でも飲んでいきませんか」と声をかけたりすることで、悩みを話しやすくなる場合もあるかもしれません。保護者の大半は、我が子の成長は気にしています。信頼関係を築いた上で、遊びを通した育ちの姿を徐々に伝えていくとよいと思います。

田澤先生　園からの直接的な働きかけ以外にも、保護者同士のやりとりを通じて情報が伝わるように心がけています。例えば、保護者会では毎回、「欠席した保護者に内容を伝えてください」と、参加した保護者にお願いしています。

保護者の中には発信力が強い「インフルエンサー」がいます。そうした保護者に園の活動に積極的に入ってもらうと、悩みもまずは保護者同士で助言し合い、解決していく様子が見られるようになります。

事例1

遊びを「可視化」し、広がった遊びを多様な手法で保護者に発信 遊び込む環境をともにつくり出す

東一の江幼稚園（東京都江戸川区・私立）

東一の江幼稚園では、子どもが遊び込める環境をつくってこそ、育ちが促されると考えています。そのために、「遊びの可視化」に力を入れるとともに、遊びが広がる様子をさまざまな手法で保護者に発信しています。保育の理念や遊びの意義が共有されやすくなり、同園が大切にする「遊び込む」環境づくりに保護者の力が発揮され、さらに遊びが深まる相乗効果が生まれています。

取り組みのポイント

- ◎「遊びの可視化」をしたり、子ども自身が遊びを発表する場を設けたりして、遊びを広げ、深める。
- ◎行事や活動は遊びの一環と捉えて、子どもの主体性を育む観点から精選。行事を廃止する場合は、その理由を保護者にしっかりと説明する。
- ◎保護者には、おたよりやブログ、「育ちのノート（ラーニングストーリー）」など、複数の手法で情報を発信し、子どもの育ちや保育理念を共有する。

保護者を巻き込む環境づくりで、遊びを広げ、深める

保育室の掲示で子どもの興味や遊びの広がりを促す

遊びのプロセスのすべてが、学びや成長につながるというのが、東一の江幼稚園の保育の基本的な考え方です。園長の田澤里喜先生は、新しい幼稚園教育要領でも示されている「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、子どもがおのずと主体的にかかわる遊びをもっとも大切にしていると話します。

「そのために、単に遊ぶのではなく、『遊び込む』状態をつくり出すことを心がけています」

田澤先生は「遊び込む」ことを、子どもが興味・関心をもとに遊びをより面白くするために試行錯誤し、やりたいことが次々に生まれたり、ほかの子どもに広がったりする姿だと捉えています。こうした遊びの意義を保護者ともしっかりと共有し、日々の保育を充実させています。

遊びを充実させる手法の１つが、「遊びの可視化」です。例えば、遊びに熱中する子どもの姿を写真にとったり、子どもが出し合ったアイデアを整理したりして保育室に掲示します。すると、その子自身が「もっと頑張ろう」という気持ちになったり、興味をもったほかの子どもに遊びが広がったりします。

東一の江幼稚園
園長
田澤里喜先生

東一の江幼稚園
年長組担任
浅野萌子先生

クラス全体で行う「みんなのじかん」には、子どもが思い思いに遊ぶ「あそびのじかん」で発見したことなどをみんなの前で発表し、ほかの子どもに広げたり、アイデアを募っ

たりしていると、年長組担任の浅野萌子先生は説明します。

「みんなに『○○さんはこの遊びが得意だね』と認められるのがうれしいようで、発表をしたがる子は多いです。『みんなのじかん』を経て、『あそびのじかん』がさらに充実するという好循環が生まれています」

行事や活動は遊びの通過点 精選する際は理由を丁寧に説明

行事や活動は、遊びの一環という認識も大切にしています。

「子どもが主体的に取り組めるかという観点から精選しています。行事に向けてみっちりと練習して疲れきるのではなく、あくまでも行事は通過点として、次の遊びにつなげることも意識しています」（田澤先生）

マラソン大会は、ある保育者が「子どもにとって本当に必要か」と疑問を呈したことを機に話し合いを重ねた末、廃止しました。例えば鬼ごっこのように、いろいろな体の動かし方をする遊びで代替できると考えたからです。

「行事の廃止に否定的な保護者もいますが、時間をかけて理由をきちんと説明すると、たいていは理解していただけます」（田澤先生）

行事や活動の精選によって、準備に費やす時間が減ることで、保育者が時間や気持ちの面で余裕をもち、もっとも大切にする遊びを充実させられるようにもなりました。

多様な手法で伝えると 保護者に思いが届きやすくなる

子どもが遊び込める環境をつくる上では、保護者が重要な役割を果たしています。例えば、年長組がペットボトルのふたを使ったコマ遊びに熱中していた際、子どもから「バトル場がほしい」という意見が出ました。保育者がブログで保護者にアイデアを求めたところ、家庭から円形のシーリングライトのカバーが提供されました（**写真**）。また、消防士ごっこがはやったときには本物の消防士の父親が子どもたちの前で話をし、園庭でこんにゃく芋がとれたときには母親がこんにゃく作りを教えてくれるなど、保護者はさまざまな形で遊びに深くかかわっています。

写真● 年長組のコマ遊びのコーナー。保護者提供のシーリングライトのカバーが「バトル場」となっています。保育者がさまざまな掲示により遊びを「可視化」し、子どもの興味・関心を広げています。

こうした協力が得られるのは、園が掲げる遊びの方針への理解があるからにほかなりません。園では、保護者への情報発信には、口頭や文章、写真など複数の手法を組み合わせることを心がけています（**図**）。どの形が伝わりやすいかは保護者によって異なると考えているためです。保育者も、絵が得意な場合は文章よりも絵で日々の育ちを表現するなど、得意なことを生かして子どもの様子を伝えています。送迎時の会話や園・クラスだより、面談、ブログ、連絡アプリなどの従来の発信に加えて、2016年度から「育ちのノート（ラーニングストーリー）」、2017年度から「保育参加」を始めました。

図 東一の江幼稚園が行っている保護者への情報発信（一例）

日常の会話	その日に印象的だった姿などをお迎えの際に伝える。バス通園の子どもの保護者には電話で話すこともある。
園だより	週の予定表とともに、園長先生が保育や遊びへの思いなどを、やや理論的な側面から伝える。
クラスだより	クラスごとに月1回発行。文章やイラストなど、担任の保育者がそれぞれ得意な手法で表現する。※右写真
ブログ	写真をメインとして、短い文章を添えて、遊びの姿を伝える。保護者だけでなく、園の方針に興味をもつ人に広く発信するねらいもある。
連絡アプリ	副園長先生が親しみやすい文体で日々の子どもの姿を伝える。
面談	学期に1回、保育者と保護者が、子どもの育ちを話し合う。
育ちのノート（ラーニングストーリー）	2か月に1回、子ども一人ひとりの育ちが表れている場面を写真と文章で伝え、保護者のコメントをもらう。※右写真
保育参加（任意）	毎週火・木曜日に各クラス2人までの保護者が保育に入り、子どもとかかわりながら1日の流れを体験する。

クラスだより　浅野先生による年長組のクラスだより。イラストや子どもが発した言葉で伝えています。やわらかな印象となり、保護者に気軽に読んでもらえる効果もあります。

育ちのノート　一人ひとりの見えにくい育ちを伝える「育ちのノート」。保護者と対面で話す機会がない時期に隔月ペースで発行しています。

ラーニングストーリーで見えにくい育ちを伝える

「育ちのノート」は、目に見えにくい子どもの育ちを保護者に伝えることを目的に、２か月に１回、一人ひとりに作成しています（**P７図**）。

「遊んでいる中で子どもが興味を広げたり、試行錯誤したりしている姿を共有したいと考えました。日常の会話でも伝えますが、記録に残すことで育ちのプロセスを捉えやすくなります」（田澤先生）

例えば、「砂遊びに夢中です」で終わらせるのではなく、「どうすればもっと硬いお団子を作れるか、工夫しています」など、遊びの中にはさまざまな学びや育ちがあることを説明します。また、保護者のコメント記入欄を設けることで、双方向での意思疎通を図っています。

「家庭での姿を知り、『そこから興味が始まっていたのか』など、保育者が子ども一人ひとりをより深く見つめるきっかけにもなっています。保護者が子どもの育ちを喜ぶコメントを読むのはうれしく、保育の励みにもなります」（浅野先生）

以前は業務の合間に作成していましたが、ほかの業務に追われる場合が多く、2017年度は会議や行事の精選によって生まれた時間を作成時間として、園全体で確保しました。

2018年度は、さらに「10の姿」の視点を取り入れて子どもの育ちを伝える方針です。

「『10の姿』を用いると、保育者は子どもの育ちを表しやすくなり、保護者はその育ちがどんな力につながるのかを理解しやすくなると思います」（田澤先生）

保育参加は希望制で、毎週火・木曜日に各クラス２人までの保護者が保育に入ります。見てほしいポイントや守秘義務について、事前ガイダンスを行った後は、保護者に自由に動いてもらい、ほかのクラスの遊びに入ることもできます。参加後にはレポートを書いてもらうようにお願いしています。

「保育を体験して初めてわかることがあるだろうと考えて始めました。ある参加者は、『どうしてこんなに遊ぶ時間が長いのかわからなかったが、子どもが没頭する姿を見て、これでも足りないと感じた』と話してくれました。全員が参加するわけではありませんが、参加した保護者が『インフルエンサー（周囲に影響を与える人）』となって子どもの様子を話してくれることで、園への理解がいっそう深まっていると感じます」（田澤先生）

保護者の声
年長組男児の保護者

◎保育参加では、ある子どもがきつい言い方をすると、「そんな言い方をしたらかわいそうだよ」と、別の子どもがフォローする姿などに成長を感じました。こうした姿は、普通の「参観」では気づきにくいと思います。また、具体的にどう遊んでいるのかがよくわかったので、子どもとの会話が広がりました。

遊びの中で興味をもったことを先生方が広げてくださる過程で、「こうしたらよくなる」など、子ども同士で意見を言い合い、聞き合うことができるようになっていることも実感しています。小学校に進んでも、「この幼稚園で３年間を過ごせたので大丈夫」という思いをもっています。

アプリを活用した保護者への「遊びの可視化」を強化

今後は、保護者に向けた遊びの可視化も強化したいと考えています。

「現状、遊びの可視化は保育室内で完結しており、中に入らないとわからない状態です。写真共有アプリを使って広く保護者に発信し、まさにこれから興味が広がっていくという時点から一緒に遊びを支えていきたいと考えています」（田澤先生）

保護者との相乗効果を生かして遊びを充実させ、たくさんの学びを経験させることで、小学校以降の育ちにつなげたいと考えています。

「遊び込む中で、ますます好奇心を高め、心から面白いと感じる体験をしてほしいと願っています。そうした経験の積み重ねが、小学校での学習を始め、あらゆることに興味をもち、目を輝かせて取り組む姿につながると信じています」（田澤先生）

東一の江幼稚園

◎1966年開園。子どもの学びや育ちを促す遊びを充実させる環境づくりを追究している。園庭には砂と泥の２つの砂場を設けたり、クジャクやウコッケイを飼育したりして、多様な遊びをつくり出す。2016年度、３代目園長に田澤里喜先生が就任。

園長　田澤里喜先生
所在地　東京都江戸川区西一之江 2-28-18
園児数　236人

事例2

子どもの姿や園の思いをプロセスや背景とともに丁寧に伝えて保育への理解を深める

レイモンド南町田保育園（東京都町田市・私立）

毎月の自然体験活動を始め、遊びの質を高めることにこだわり続けるレイモンド南町田保育園。ポートフォリオやマインドマップを活用し、日々の保育のつながりと子どもの育ちをタイムリーにきめ細かく保護者に伝えることで、保育への理解を深め、ともに子どもを育てる信頼関係を築いています。

取り組みのポイント

- ◎日常の保育や月1回の「もりへいこう」などに常時、保護者の参加を受け入れ、「ふだんの子どもの姿」を伝える。
- ◎子どもの興味などを整理した「マインドマップ」を保護者と共有し、1つの遊びがつながって発展していく様子をわかりやすく伝える。
- ◎行事アンケートでは、否定的な声を含め、保護者からのすべての意見に対して園としての考えを示すことで、意思の疎通を図る。

保護者の理解を土台に能動的な遊びをつくり、つなげる

毎月の自然体験活動で生き生きと遊ぶ姿を体感

秋が深まりつつある11月のある日、いつにも増して元気な子どもたちの声が、東京都町田市にある大地沢青少年センターの森の中に響きわたりました。山の中に入ったり、焼き芋を作ったり、玉ねぎの皮で染め物をしたり――。思い思いに動く子どもたちのそばには保育者とともに保護者がつき、ともに遊んだり、作業を手伝ったりし、一緒に活動をつくり上げていました（**P10 写真1**）。

レイモンド南町田保育園では、月1回、1時間ほどバスに乗ってこの施設を訪れ、「もりへいこう」という活動を行っています。子どもの自主性や能動性を大切にしたこの活動では、毎月の内容を子どもたちが話し合って決めます。例えば、11月は、ある子どもが「焼き芋をしたい」と発案し、「どうやって火をおこそうか」「まき割りをしよう」など、作り方や必要な準備についてアイデアを出し合いました。そのため、現地に到着した子どもたちは、自分からそれぞれの役割に分かれ、スムーズに作業に取りかかりました。

「もりへいこう」は基本的に5歳児が対象となりますが、ほかの遊びを優先したい子どもは園に残ることもあります。活動内容に興味をもった3・4歳児が参加することも自由です。園長の鈴木康人先生は「幼児期に育てたいさまざまなスキルや情緒的な成長は、自分からやりたいと思って取り組んだ体験を通して得られるものです」と話します。そのため、活動内容はもちろん、そもそも参加するかどうかの判断も子ども

レイモンド南町田保育園
園長
鈴木康人先生

▲▶まきを割って火をおこして焼き芋作り。

◀山登り。

たちに委ねています。「子どもはこう考えるはず」「これをしたいはず」などという、いわば枠にとらわれた子ども観から脱し、一人ひとりの思いや背景に想像を巡らせること。それが、能動性を引き出すポイントだと鈴木先生は考えています。

「もりへいこう」は保護者参加型であることも大きな特色です。子どもと一緒に活動を楽しむ中で家庭とは異なる姿を感じ取る保護者も多いようです。この日参加した保護者の1人は、「自分のやりたいことに生き生きと取り組む姿が印象的でした。大人の指示を受ける前から、しっかりと役割分担をして作業していることにも感心しました」と話します。

園では、子どもの成長を保護者と共有したいという思いから、保育への参加も常時、受け入れています。

「特別な日ではなく、普段のありのままの保育を見てほしいという願いがあります。そして、日々の保育一つひとつに園の思いがあり、子どものさまざまな育ちがあることを少しずつ理解していただきたいと考えています」（鈴木先生）

写真1●「もりへいこう」では、毎月子ども自身が考えた季節感あふれる活動を展開しています。保護者の参加を積極的に受け入れているため、子どもも自然に多くの保護者とかかわっています。

毎日のポートフォリオとマインドマップで成長を視覚化

保護者には見えにくい保育を見える形にする一手段として、クラスごとに毎日作成する「ポートフォリオ」があります。その日の遊びや活動の中で特に印象的だった場面を写真と文章で表現しており、お迎えの際にパッと目に入りやすいように、写真を多めに構成しています（**写真2**）。

ポートフォリオを通して、遊びの中の育ちをわかりやすく伝える工夫も凝らしています。昨年10月からは「10の姿」の視点を参考にして、その遊びからどのような学びの芽が見られたかを表すタイトルをつけることにしました。

「例えば、芋掘りのときに子どもにはかりを渡したら重さを比べ始めた場面を紹介し、『数量への関心・感覚が育っている』といったタイトルをつけました。翌日には保育室にもはかりを置いていたのですが、このようにして数量への関心を広げようとしていることも、保護者に感じていただきたいです」（鈴木先生）

育ちに関連したタイトルをつけることには、保育者の力量を育てるねらいもあります。

「遊びからどのような育ちがあるかを見取る力には、保育者によって差があります。保育者には、常に、目の前の子どもの遊びが何につながるかを考える力を高めてもらいたいと考えています」（鈴木先生）

子どもの興味や思いを目に見えるようにする試みが、「マインドマップ」です。これは、子どもの興味や発想の変化、言動の流れなどを視覚化したもので、保育室や廊下の壁など保護者が目にしやすい場所に掲示します。「もりへいこう」に向けた話し合いも、マインドマップとして整理していました（**写真3**）。

「子どもの遊びは単発ではなく、つながりをもっていますから、点で

写真2●廊下に掲示されたポートフォリオ。タイトルをつけ始めてから、子どもの育ちが伝わりやすくなりました。多くの保護者が毎日楽しみにしています。

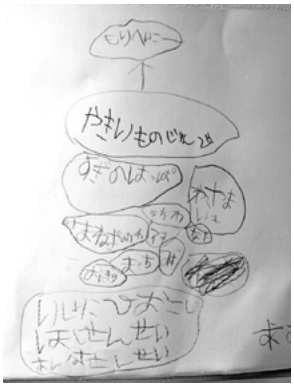


写真3●「もりへいこう」の焼き芋作りについてのマインドマップ。話し合いを通して、子どもの発想が広がっていく様子がわかります。

はなく線で見ることが大切です。保護者がマインドマップを見ることで、どのような経緯で今の遊びに至ったかを把握したり、子どもの発想の豊かさを感じたりすることができます」（鈴木先生）

マインドマップは、各クラスの子どもがどのような興味に基づいて遊びを展開しているかを、保育者同士が共有することにも役立ちます。また、子どもが今まさに何に興味があるかを捉えることで、次の計画も立てやすくなるため、今後、週案に取り入れることも検討しています。

「あらかじめ遊びや活動を決めるのではなく、マインドマップを用いて子どもの興味の変化を捉え、その都度ふさわしい環境や援助を柔軟に提供したいと考えています。週案を簡素化して保育者の負担が軽減されれば、遊びを充実させることにもつながると思います」（鈴木先生）

保護者アンケートを活用し園の考えを丁寧に伝える

保護者と思いを共有するために、行事ごとのアンケートも活用しています。アンケートは、その後の行事の改善に生かすだけではなく、批判的なものを含め、保護者からの声はすべて原文通りに公開。寄せられた意見には、必ず園の考えを添えています。こうした園の姿勢が、保護者の園に対する信頼感につながっているようです。（**写真４**）。

「保護者から、『こうした方がよい』といった意見が寄せられたとき、その通りであれば取り入れますし、園の方針と相違がある場合には『こういう考えに基づいているため、それは難しいです』などと、はっきりと説明します。そうすることで、園の考え方への理解を深めてもらえます」（鈴木先生）

懇談会を、保護者同士が育児に関する１つのテーマに沿って語り合う形式とすることもあります。例えば、保護者が自身の幼少期を振り返るなど、わが子と重ねて考えることで、目の前の姿ばかりを気にしてしまいがちな視点をいったん「緩める」「広げる」ことがねらいです。

これらの働きかけを続けた結果、開園から３年を経て、保護者の姿に変化が見られるようになりました。

「初めは『ただ預けているだけ』という感覚の保護者もいましたが、しだいに保育への理解や、子ども理解への感度が高まってきたと感じます。中には『今年の５歳児は、どのように協同的な学びを進めていく予定でしょうか』など、専門的な質問を受けることもあります。保護者と園がともに子どもを育てているという一体感が醸成されつつあります」（鈴木先生）

保護者の声
「もりへいこう」に参加した保護者

◎園は、「今、こんな力が育ちつつある」と、子どもの成長をタイムリーに伝えてくれるので、常に安心した気持ちで子どもを見守っています。遊びを通して、生きる力そのものが育っていると感じます。例えば、遊びの中で集中したり、段取りを考えて進めたりする力は、きっと小学校での学習の支えになると思います。

写真４●エントランスホールに保護者アンケートの意見と園の考えを掲示。園専用のウェブサイトでも公開しています。

鈴木先生は、今後も試行錯誤を重ね、子どもたちに将来の学びにつながる力を育みたいと話します。

「子どもたちは今後、先の見通しをもちにくい社会を生きていきます。そのために、自分で楽しいことを生み出したり、新しい価値観を創造したり、問題への解決方法を見いだしたりと、必要なものを消費するのではなく、創り出せる人に育ってほしいと願っています。幼児期は、その軸となる心を揺さぶられる原体験をたくさん積む時期と捉え、保護者や地域とともに遊びを充実させていきたいと思います」（鈴木先生）

社会福祉法人檸檬会 レイモンド南町田保育園

◎ 2014年開園。法人理念は、「子育てによろこびを　社会に新しい風を　笑顔あふれる子どもが住む　未来の地球のために」。固定観念にとらわれず、子ども一人ひとりの興味に寄り添って、遊びを通して、生きる力を育む保育をめざす。

園長　鈴木康人先生
所在地　東京都町田市鶴間 8-4-30 クレインドビル１階
園児数　60 人（0 ～ 5 歳）

事例3

「10の姿」を活用して遊びの中の学びを伝え育ちの見通しを保護者と共有する

札幌市立もいわ幼稚園（北海道札幌市・公立）

保護者にも遊びを「面白がって」もらうことを目的として、「遊ぼうDay」という保育参加に力を入れている札幌市立もいわ幼稚園。遊びの楽しさを体感した上で、「10の姿」を活用して学びや育ちを伝えることで、保育への深い理解を促しています。子どもの成長を支えるために保護者に「宿題」を出していることも、同園ならではの取り組みです。

取り組みのポイント

- ◎すべての家庭の保護者に保育参加を体験してもらい、遊びの面白さを体感してもらう。
- ◎「10の姿」の視点から遊びの中の学びや育ちを保護者に説明し、子どもの成長の見通しをもってもらう。
- ◎子どもの成長を支える愛着関係を深めるための「宿題」を保護者にお願いする。

保護者に遊びを面白がる体験を提供し、保育の理解へとつなげる

保護者との対話を通して遊びへの理解を促す

札幌市立もいわ幼稚園では、学期ごとの保育参観のほか、年9回、保護者が保育に参加する「遊ぼうDay」を実施しています。2017年12月の回には6人の保護者が参加し、子どもと一緒にサンタクロースへの手紙を書いたり、クリスマスツリーの工作をしたり、雪遊びをしたりと、遊びの中に自然に溶け込む姿が見られました（**写真1**）。園長の笹山雅司先生は、そのねらいをこう話します。

「保育参観は子どもたちの活動を見ていただく日で、『遊ぼうDay』は大人も一緒になって心から遊びを面白がり、遊びの大切さを実感していただく日です。普段、保育者がどのように子どもとかかわっているかを知ってほしいという思いもあり、すべての家庭の保護者に最低1回は、『遊ぼうDay』への参加をお願いしています」

1時間半あまりの活動終了後には、笹山先生とともに懇談会も行われました（**写真2**）。最初に笹山先生が「みなさんは、子どもの頃にどんな遊びをしていましたか」と問いかけると、「自然の中を夢中で走り回っていた」「けっこう危険な遊びをしていたかも」など、保護者も当時を思い出して、子どもへの共感を高める様子が見られました。

札幌市立
もいわ幼稚園
園長
笹山雅司先生

当日の子どもの姿を語り合う中で、ある保護者が「小麦粘土でパンを作ろうと誘いましたが、子どもたちはただ丸めたり、引っ張ったりすることに夢中でした。目的がなくても楽しめるのですね」と発言すると、笹山先生は、「今は粘土の感触が面白い時期なのでしょう。何かを作るというより、粘土で遊ぶことそのも

写真1● 2017年12月に実施された「遊ぼうDay」。保護者は自分の子どもだけではなく、ほかの年齢のクラスも回り、それぞれの遊びを楽しんでいました。

写真2● 30分間ほどの懇談会は、終始、和やかな雰囲気でした。笹山先生は保護者の言葉を引き出すことを大切にしながら語り合いをリードしていました。

のが目的なのだと思います」と説明しました。また、子どもの遊びを手伝おうとしたら断られたという保護者に対しては、「同じ遊びをしていても、感じることや面白がることは一人ひとり違います。遊びの中にはその子どもの強い思いが込められているため、『自分でやりたい』という気持ちが強かったのでしょう」と説明しました。このように、一人ひとりの保護者と対話を深めながら、遊びの中にある子どもの思いを具体的に伝え、発達段階における意味や、その後の育ちにどうつながるかをわかりやすく解説していきました。

「10の姿」で遊びを説明し成長の見通しを俯瞰して伝える

笹山先生は、懇談会で子どもの成長を解説する際に「10の姿」のイメージ図を用いました。

「保育者の間で、『10の姿』を使って子どもの成長を語り合う研修を実施していますが、保護者とも同じ視点を共有したいと考えています。それによって保護者は子どもの成長に見通しをもち、目の前の『できた・できない』にとらわれ過ぎずに子どもに接することにつながります。3・4歳児についても、どのような成長の芽生えが見られたかを『10の姿』を通して伝えることで、子どもの育ちを俯瞰して見てもらえるように心がけています」（笹山先生）

笹山先生は、子どもの具体的な様子を挙げて、「サンタクロースへの手紙を書きたがっていた子どもがいましたね。それが文字への関心・感覚の表れです」などと考え方を保護者に説明し、遊びの中には学びがあることへの理解を促しました。そして、「幼児期には、いろいろな遊びから栄養をもらって根っこがつくられます。それが土台となって、小学校で幹が育っていきます。だからこそ、私たちは遊びを大切にしています」と遊びの意義を説明すると、保護者はうなずきながら耳を傾けていました。

このほかにも同園では毎年、父親が保育に参加する「お父さんと遊ぼう週間」を設けており、両親ともに遊びの面白さを実感してもらう機会を充実させています。

成長を支える愛着関係を保護者への「宿題」で深める

遊びを通した子どもの成長を支える土台として、保護者と子どもとの愛着を深める働きかけも大切にしています。ユニークな取り組みの1つが、新入・進級した後に落ち着いてきた6月初めと、夏・冬の長期休業期に保護者に「宿題」を出すことです。

宿題とは、「子どもが甘えてきたら抱っこして応じる。そして、なぜ甘えているのかを考える」「お手伝いをしてくれたら『ありがとう』と言う」「何かを話しかけてきたら、『そうなんだね』と受け止める」など、毎回、複数のテーマから各家庭が1つを選んで1週間実践し、子どもの変化などについて感想を書いてもらうというものです。

「愛着を土台とした心の安定があってこそ、遊びの中で新しいことにチャレンジする意欲が生まれ、成長が促されます。『宿題』が保護者の子どもへの理解を深め、その後の接し方が変わるきっかけとなってほしいと考えています。私たちの期待通り、保護者は積極的に取り組み、効果を実感してくださっています」（笹山先生）

実際、実施後のアンケート結果からも、『宿題』を機に子どもや保護

者が変化していることがうかがえます。保護者からは、「イライラしていても『ありがとう』の言葉で、みんなが穏やかになれた」「親が対応や言葉を変えると、子どもが違う反応を見せてくれた。今後も続けたい」「お互い笑顔になってよい。スキンシップを大事にしていきたい」など、新たな気づきや前向きな言葉が多く寄せられています。

毎日のお迎えの時間に保育者が遊びの姿を解説

子どもが成長する姿を日常的に共有することも大切にしています。

エントランスの掲示板の活用がその１つです。ここには定期的な連絡事項のほかに、遊びの中で各年齢の「10の姿」の育ちがよく表れている場面を定期的にピックアップし、イメージ図とともに写真と文章で紹介しています（**写真３**）。遊びの様子をただ伝えるのではなく、「10の姿」の視点から読み解いて、学びや育ちを丁寧に伝えているのが特徴です。また、読んだ後に「いいね」シールを貼ってもらうことで、保護者に目を向けてもらいやすくしています。

お迎えの際には、エントランスホールに集まった保護者に対し、担任がその日の遊びの印象的な場面を伝えます。その際、遊びの様子を模造紙や画用紙に大まかにまとめたものを見せて説明します（**写真４**）。そうした資料を作る時間が取れないときは、モニター画面に写真を映し出して遊びの様子を伝えることもあります。

そのほか、園だよりや学級だよりに加えて、保護者や地域住民に向けて保育の様子を発信する掲示板を道路沿いに設置するなど、さまざまな方法で情報発信に努めています。

今後も、家庭や地域と手を携え、いっそう遊びを充実させて、子どもの育ちを支えていく方針です。

「３年間を通して、自ら物事に取り組んで最後まで諦めずに頑張ったり、相手と話して折り合いをつけた上で、『自分はこう思う』と伝えられたりする力を育てたいと考えています。こうした力を遊びの中でどう育てていくか、これからも研究と実践を続けていきます」（笹山先生）

保護者の声
「遊ぼうDay」に参加した保護者

◎最近、子どもが雑誌やテレビを見て、お城に興味をもっています。今日、園で子どもの遊びを見ていたら、城壁を意識した基地を作っており、家庭と園での遊びがつながっていることを理解しました。

◎何もない状態から、突然何かになりきったりして、遊びを生み出していく子どもの姿がすごいと感じました。家でもそのような遊びを意識してみたいと思いました。

◎子どもたちはそれぞれ興味のある遊びを楽しみ、満足したら次の遊びに移っていました。活動の時間が細かく設定されておらず、自分の好きなタイミングで思い思いに遊べるのがよいと思いました。

◎子どもが「ハンバーガー屋さんをやりたい」と言ったら、サッと道具を用意するなど、遊びをつくり上げるための先生方のサポートに感心しました。

写真３● ３歳児の遊びの様子を紹介する掲示。各場面で「10の姿」のどの育ちがあるかを明示しています。掲示の両端に見えるハートのマークは「いいね」シールです。情報過多にならないように、周囲に別の掲示物を貼らずにすっきりとさせていることも工夫の１つです。

写真４● お迎えの時間、その日の遊びの印象的な場面を伝えます。この日は、５歳児が数日間にわたって、サンタクロースについて話し合い、手紙を書くまでの様子を、模造紙に写真と文章にまとめて説明しました。

札幌市立もいわ幼稚園

◎1976年開園。３年間の保育を通し、主体的・対話的で深い学びを経験する中で、将来にわたって必要とされる「生きる力」を育むことに重点を置く。札幌市南区の研究実践園として、他の幼稚園や保育所、小学校などと連携し、幼児教育の向上に努めている。

園長　笹山雅司先生
所在地　北海道札幌市南区川沿18条2-1-13
園児数　65人（3～5歳）

参考資料

保育参観・保育参加などでご活用ください！

保護者とのコミュニケーションシート

このシートは、保育参観・保育参加など、保護者が園の保育に触れる機会に保護者に配布し、遊びへの理解を深めていただくものです。

シートのねらい

- 【保育者】遊びを見取る力とそれを言語化する力をつける
- 【保護者】遊びを見る視点を知り、新要領・指針の考え方に触れる
- 【保育者と保護者】それぞれの立場で１つの場面を言語化することで、共通の軸で子どもの姿を語り合ったり、遊びへの理解を深めたりする

記入方法

❶参観・参加当日の中心的な活動・遊びに焦点を絞り、その概要などを一般的な指導案と同様に記入します（ただし保護者に伝わりやすいようにわかりやすく簡潔に）。加えて活動のねらいや保育者の願い・援助を踏まえて、保護者に見てほしい観点を右列に記入します（記入例参照）。
❷記入したシートを参観・参加の当日、または事前に保護者に渡し、感じたことをメモしてもらいます。メモをもとに事後懇談会などで意見を交わすこともできます。終了後に保護者から回収します。
❸参観・参加後、当日の様子や保護者のメモを踏まえて、今後の保育にどう生かすかを、保育者が記入します。

◎このシートのひな形（A4 判・Word 形式・変更可能な記入例入り）はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからダウンロードできます。 ▶▶▶ ベネッセ　これからの幼児教育 で 検索

記入例

ダウンロード

5歳児　○○組　○名（男児○名／女児○名）　担任　○○○○

5月10日（木）○：○○～○：○○

ねらい　友だちとの遊びの中で、自分の思いを表したり、友だちの思いを受け入れたりしながら、一緒に遊ぶことを楽しむ。

内容
・自分の思いを言葉に表して、一緒に遊んでいる友だちに向けて伝える。
・友だちの思いや動きを受け入れたり、取り入れたり、力を合わせたりしながら一緒に遊ぶ楽しさを感じる。
・遊びに必要な場や物を考えたり工夫したりして、遊ぶ楽しさ・面白さを感じる。

主な活動（遊び）　好きな遊び

時間	子どもたちの活動	保育者はこんなことを願い、援助します	わが子やお友だちの姿はどんな様子でしたか
9:20	好きな遊び 〈保育室・遊戯室〉 • 忍者ごっこ • お店屋さんごっこ • ショーごっこ 〈園庭〉 • 砂場 （大きな山や川を作って遊ぶ） • 助け鬼	• 自分の思いを表しながら、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを感じてほしい！【③⑨⑩】 ⇨自分の思いを相手に伝えようとしている姿を認めながら、どうすれば伝わるのかを一緒に考えたり、必要に応じて援助したり、架け橋となったりする。 • 仲間意識をもって自分たちの遊びを大切につくっていってほしい！【③⑤⑥⑩】 ⇨一緒に遊んでいる友だち同士だけの場を保障する。 ⇨大型積木や巧技台など、遊びの場をつくれるものを使いやすく用意しておく。 • 友だちの思いを受けたり、力を合わせたりしながら、一緒に遊ぶ楽しさ・よさを感じてほしい！【①③⑦⑧】 ⇨自分とは違う友だちの考えのよいところ、力を合わせるからこそできることなど、場面を捉えて具体的に言葉に出して伝えていく。 • 遊びのイメージをもち、遊びに必要な場や物を話し	☆どんな場面で、自分の思いや考えを言葉に表して伝えながら遊んでいますか？ • • ☆用具や遊具（大型積木・巧技台など）の扱い方が分かり、自分たちで協力して遊びの場を作っていますか？ • • ☆どんな場面で、友だちの考えを聞いて遊ぶ様子が見られましたか？ ☆トラブルが起こった時には自分たちなりに解決しようとしていますか？ •

保育者の願い・援助の欄に、対応する「10の姿」の項目名または番号を記入する

保護者には、子どもの足りない部分よりも、できている部分を見るよう声かけする

今日の保育参観・保育参加全体を通して感じたこと、お気づきの点

保護者が記入。参観・参加中ではなく事後に時間をとる形でも可。

保育参観・保育参加後の保育者記入欄

保育者が記入。当日の様子を振り返って、保育のねらいや遊びの大切さなど、保育者が伝えたいことが伝わったかどうかの観点から、「次の保育に生かすなら」「次回の学級だよりで伝えたいと思ったこと」など、保護者に伝えたいことを書く。参観・参加してくれたことに対する返礼やフィードバックにもつながる。

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

- ①健康な心と体
- ②自立心
- ③協同性
- ④道徳性・規範意識の芽生え
- ⑤社会生活との関わり
- ⑥思考力の芽生え
- ⑦自然との関わり・生命尊重
- ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ⑨言葉による伝え合い
- ⑩豊かな感性と表現

※園長先生方などへの取材をもとに編集部で作成

小学校入学前の生活に関する振り返り調査

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は共同で、2015年から毎年、小学1年生～高校3年生の親子を対象にした「子どもの生活と学びに関する親子調査」を行っています。今回ご紹介するのは、2016年調査の回答者のうち、小学1年生の保護者を対象に行った「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」です。調査結果からは、幼児期における保育者や保護者のかかわりが、小学校入学後の子どもの姿につながることが明らかになりました。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください
〈例：ベネッセ教育総合研究所「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」（2017）〉。

保育者のかかわりと保護者の意識・行動との関係

初等中等教育研究室 主任研究員 邵 勤風

しょう　きんふう　初等中等教育領域を中心に、子ども、保護者、教員を対象とした意識や実態の調査研究に多数携わる。これまで担当した主な調査は、「学習基本調査・国際6都市調査」（2006～2007年）、「第3回子育て生活基本調査」（2007～2008年）、「小中学生の学びに関する実態調査」（2014年）など。近年、学校段階間連携といったテーマに関心をもち、子どもの発達を踏まえ、学びの連続性を保障するために、周囲（親や教員など）の適切な支援のあり方を考えている。

調査結果のポイント

◎小学校入学前の子どもの保護者は、生活習慣や文字・数・言葉といった「認知能力」につながるかかわりを多く行っているが、入学してからの1年間を振り返ると、主体性、粘り強さといった「非認知能力」や思考力につながるかかわりを入学前にしておくべきだったと考える割合が高くなる。

◎子どもや保護者に対する保育者のかかわりを、保護者は評価している。保育者による子どもへの直接的なかかわりだけでなく、保護者に対する子育て支援も、子どもの成長に間接的によい影響を与えている。

◎保護者は楽しさ、役立ち度、子どもの成長への実感のすべてで、園での生活に高い満足感を得ている。

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で行う「子どもの生活と学びに関する親子調査」では、小学1年生から高校3年生までの同一の子どもと保護者に毎年調査を行うことで、子どもがよりよい成長を遂げるにはどの時期にどのような支援があるとよいかを解き明かそうとしています。今回は2016年の同調査の回答者から小学1年生の保護者に対して「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」を実施して、保護者や保育者の入学前のかかわりが子どもに与える影響を調べました。

次ページから、具体的なデータをご紹介します。

■「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」の調査概要

調査対象：全国の小学1年生の保護者1,853人
そのうち回答者が母親で、かつ「子どもの生活と学びに関する親子調査2016」にも回答した1,491人を分析対象としている

調査時期：2017年2月
調査方法：郵送法による自記式質問紙調査
調査項目：入学前の子どもの生活、経験／保護者のかかわり／園での様子／など

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。ぜひご活用ください。▶ http://berd.benesse.jp/

1　小学校入学前と後における、保護者のかかわりの実態と意識

入学後の1年間を振り返って気づく
主体性や思考力を育てるかかわりの重要性

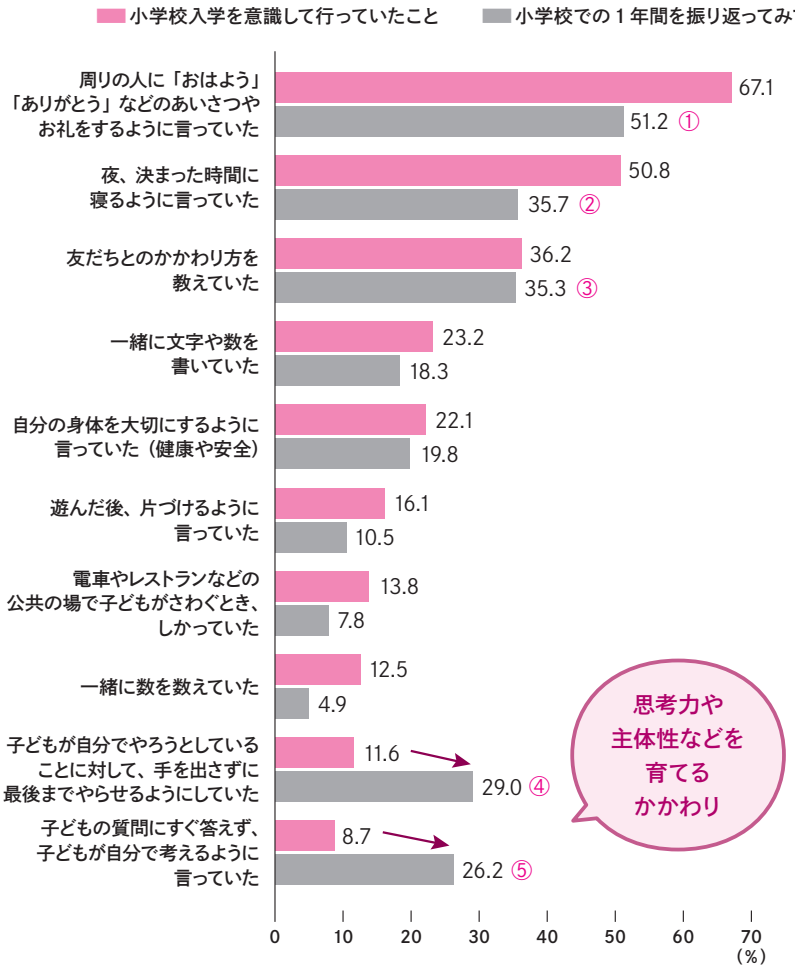


表 保護者の小学校入学前の子どもへのかかわり

生活習慣	夜、決まった時間に寝るように言っていた
	遊んだ後、片づけるように言っていた
	子どもに家のお手伝いをするように言っていた
	周りの人に「おはよう」「ありがとう」などのあいさつやお礼をするように言っていた
人との関係性・マナーなど	友だちとのかかわり方を教えていた
	いやなことがあっても、がまんするように言っていた
	電車やレストランのなどの公共の場で子どもがさわぐとき、しかっていた
	自分の身体を大切にするように言っていた（健康や安全）
文字・数・言葉	一緒に数を数えていた
	一緒に言葉遊びをしていた（しりとり、だじゃれなど）
	一緒に文字や数を書いていた
遊び	子どもに外遊びをさせるようにしていた
	一緒にブロックや積み木などをしていた
	一緒に絵を描いたり、粘土や折り紙で遊んだりしていた
主体性・粘り強さ・思考力	１つの遊びには多様な遊び方があることを気づかせようとしていた
	子どもと一緒に出かけた後、お互いが感じたことなどを話していた
	子どもの質問にすぐ答えず、子どもが自分で考えるように言っていた
	子どもが自分でやろうとしていることに対して、手を出さずに最後までやらせるようにしていた

※１「よくしていた」＋「ときどきしていた」の％。
※２ 保護者の、小学校入学前の子どもへのかかわりに関する18項目のうち、❶入学を意識して行っていたこと、また❷小学校での１年間を振り返ってみて、入学前に行っておくべきだと思うことを、それぞれ３つまで選択。❶か❷について、選択率が 10% 以上の項目をピックアップして図示した。
※３ ①～⑤は、上記❷について数値の高い順に５位までを示した。

上のグラフは、保護者の小学校入学前の子どもへのかかわりに関する全 18 項目（表）の中から、「小学校入学を意識して行っていたこと」と、小学校での１年間を振り返り、「入学前に行っておくべきだと思うこと」を、それぞれ３つずつ選んでもらい、選択された割合が高い項目を示したものです。

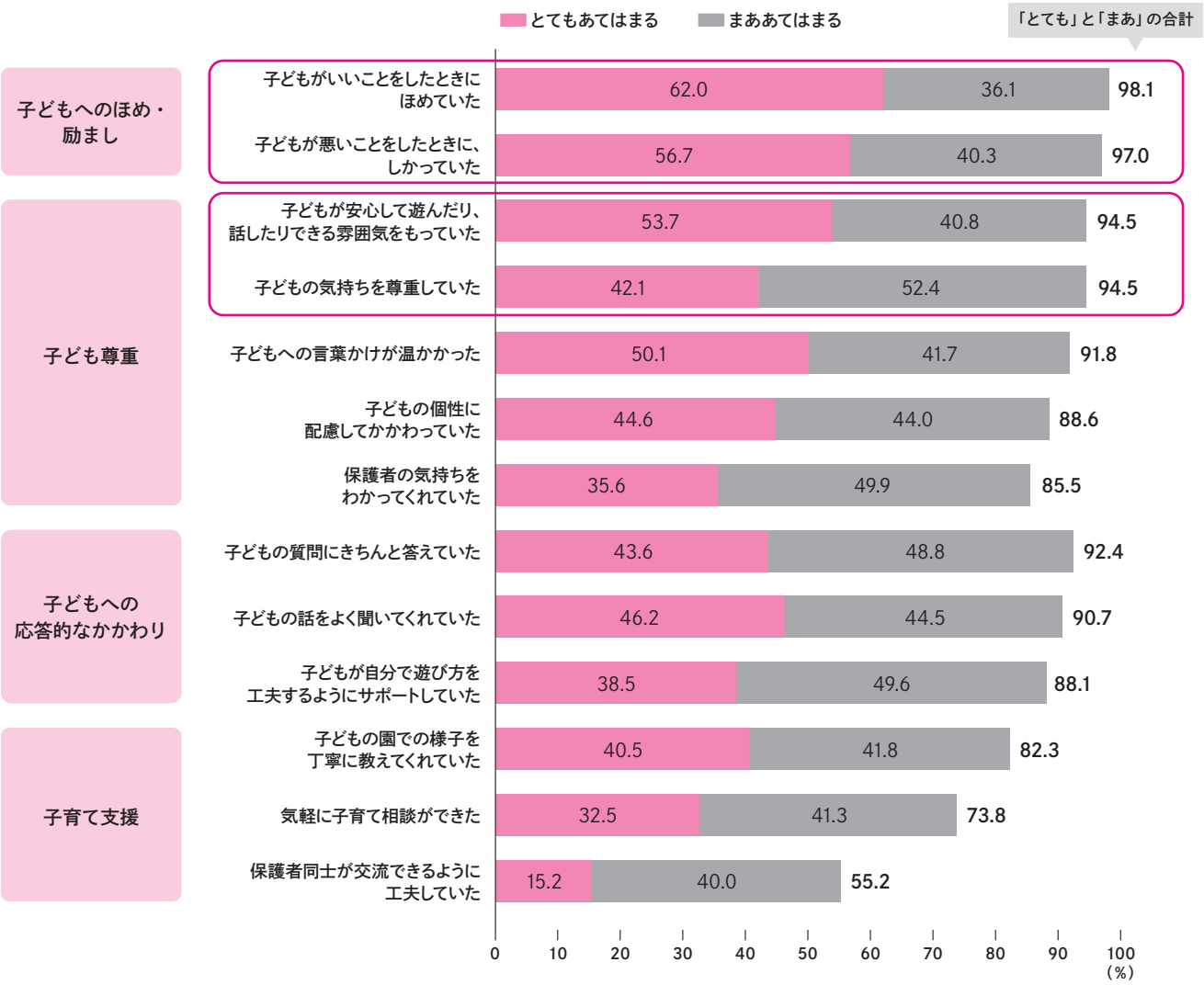
行っていたこととしては、「周りの人に『おはよう』『ありがとう』などのあいさつやお礼をするように言っていた」「夜、決まった時間に寝るように言っていた」などの「生活習慣」や、「友だちとのかかわり方を教えていた」という「人との関係性・マナーなど」、「一緒に文字や数を書いていた」などの「文字・数・言葉」に関するかかわりが上位を占めます。

１年間を振り返り、入学前に行っておくべきだと思うことも、上位３つまでは実際に行っていたことと同じになりました。ただ、その後には「子どもが自分でやろうとしていることに対して、手を出さずに最後までやらせるようにしていた」「子どもの質問にすぐ答えず、子どもが自分で考えるように言っていた」という、主体性、粘り強さといった非認知能力や思考力につながるかかわりが続きます。

保護者は入学後の１年間を経験することで、主体性や粘り強さといった非認知能力や思考力につながる力を幼児期に育てることの重要性に気づいたと考えられます。

2 園での保育者のかかわりについて、保護者が感じたこと

保護者は、子どもや保護者に対する保育者のさまざまな働きかけを高く評価



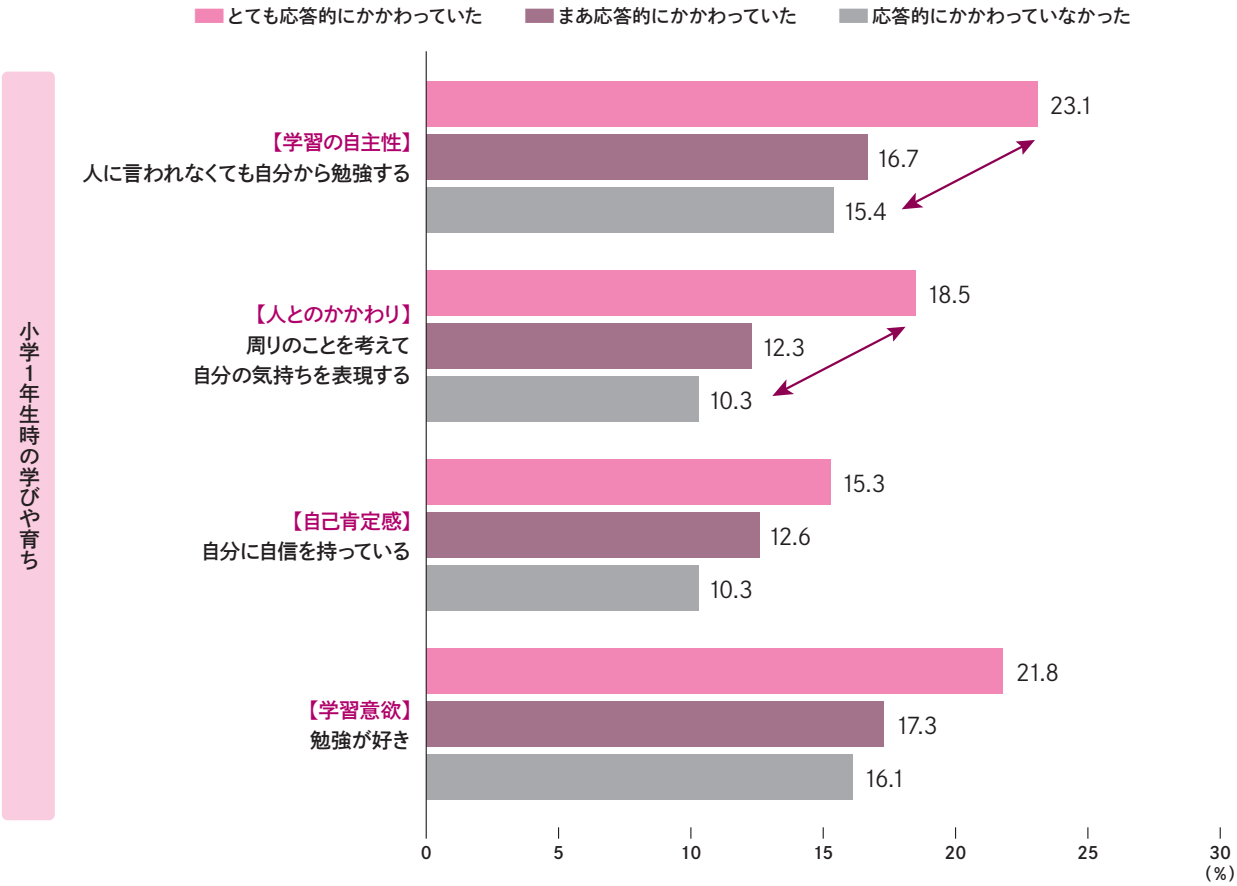
2は園での保育者のかかわりについて、保護者がどのように感じたかを示したグラフです。子どもや保護者に対する保育者のかかわりには、「子どもへのほめ・励まし」「子ども尊重」「子どもへの応答的なかかわり」「子育て支援」という4つの要素があります。

保護者が特に「あてはまる」と感じているのは「子どもがいいことをしたときにほめていた」「子どもが悪いことをしたときに、しかっていた」という「子どもへのほめ・励まし」に関するかかわりや、「子どもが安心して遊んだり、話したりできる雰囲気をもっていた」「子どもの気持ちを尊重していた」など「子ども尊重」に関するかかわりで、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合計すると95％前後になります。他のかかわりも80％を超えるものが多く、いちばん低い「保護者同士が交流できるように工夫していた」でも約55％です。

保育者は子どもや保護者に対してさまざまな働きかけをしており、保護者はそれらを高く評価していると言えます。

3　保育者のかかわりと、小学１年生時の学びや育ちとの関連

子どもへの応答的なかかわりは小学校入学後の主体的な学習姿勢に好影響



※１　保育者の「子どもへの応答的なかかわり」のうち、「子どもの質問にきちんと答えていた」「子どもの話をよく聞いてくれていた」の２項目を使用。２項目の得点を算出し、「子どもへの応答的なかかわり」を「高群」、「中群」、「低群」に３分割した。「高群」を「とても応答的にかかわっていた」、「中群」を「まあ応答的にかかわっていた」、「低群」を「応答的にかかわっていなかった」とした。

※２「人に言われなくても自分から勉強する」「周りのことを考えて自分の気持ちを表現する」「自分に自信を持っている」「勉強が好き」は、この「小学校入学前の生活に関する振り返り調査」に回答した保護者が、子どもが小学１年生の時に回答した「子どもの生活と学びに関する親子調査 2016」の中の項目である。横棒の数値は保護者から見て子どもが「とてもあてはまる」の％を表している。また「勉強が好き」については、保護者から見て子どもの勉強が「とても好き」の％を表している。

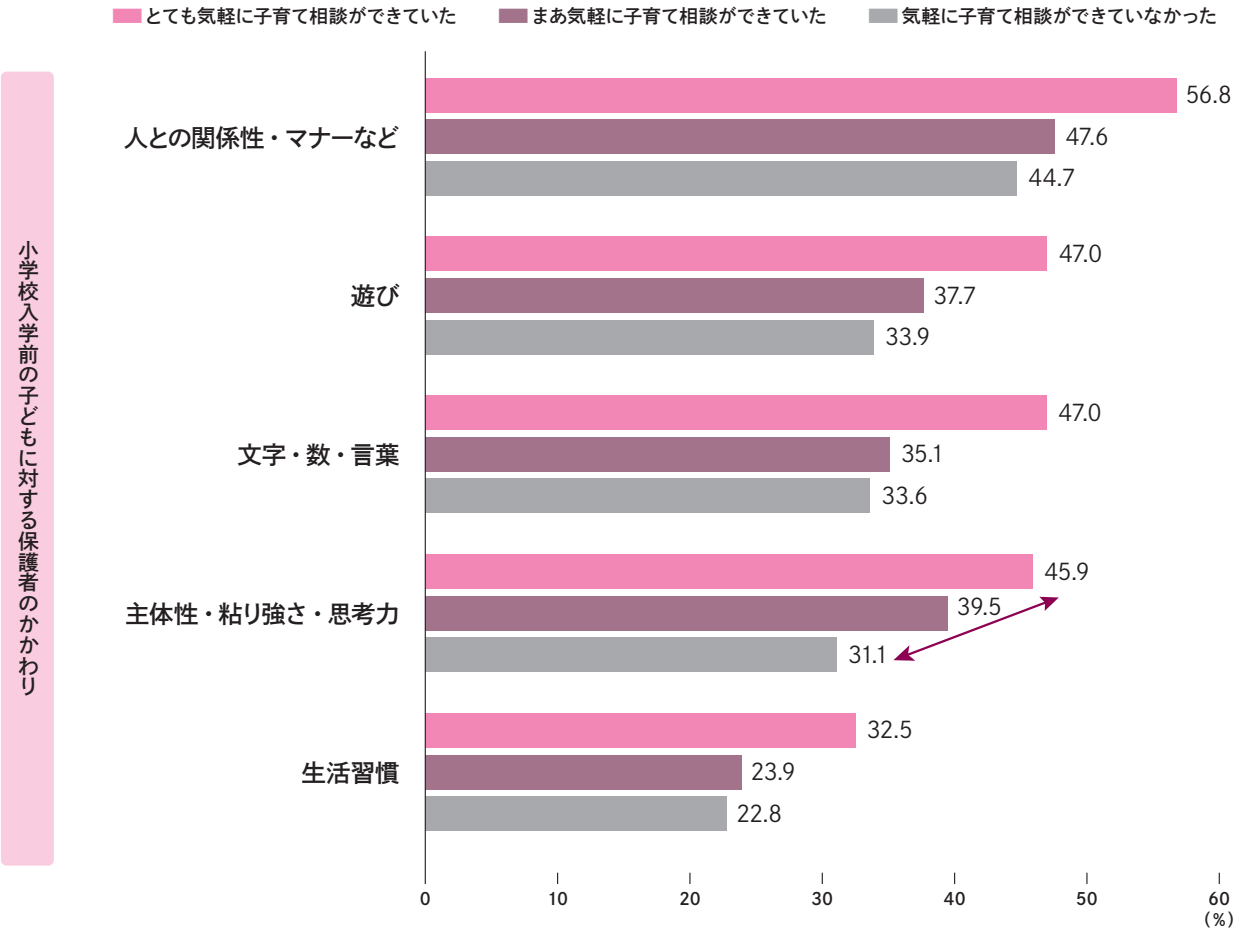
3は、2（P18 参照）のグラフに関連して、保育者のかかわりが、子どもの小学１年生時にどのような影響を与えているかを示したグラフです。子どもが小学１年生時の「人に言われなくても自分から勉強する」（学習の自主性）、「周りのことを考えて自分の気持ちを表現する」（人とのかかわり）、「自分に自信を持っている」（自己肯定感）、「勉強が好き」（学習意欲）という４つの項目について、幼児期における保育者の応答的なかかわりとの関連を見ました。

４つの項目すべてで、保育者が応答的にかかわっているほど、あてはまる割合が高くなっています。また、「とても応答的にかかわっていた」と「応答的にかかわっていなかった」の差に着目すると、「学習の自主性」や「人とのかかわり」は両者の差が約８ポイントあり、保育者の応答的なかかわりの影響がより大きいことがわかります。

園で保育者が子どもの質問にきちんと答え、話をよく聞くなどの応答的なかかわりをしていると、就学後の子どもの学びや育ちによい影響をもたらすと言えそうです。

4　子育て支援と、保護者の入学前の子どもへのかかわりとの関連

子育て支援は
保護者の子どもへのかかわりに与える影響が大きい



※1　保育者の「子育て支援」のうち、「気軽に子育て相談できた」を使用。「とてもあてはまる」を「とても気軽に子育て相談ができていた」、「まああてはまる」を「まあ気軽に子育て相談ができていた」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「気軽に子育て相談ができていなかった」とした。

※2　保護者の小学校入学前の子どもへのかかわりを「人との関係性・マナーなど」「遊び」「文字・数・言葉」「主体性・粘り強さ・思考力」「生活習慣」という5つに分類（質問項目の詳細はP17表参照）。分類ごとに得点を算出し、保護者のかかわりの高い順から「高群」「中群」「低群」に3分割した。横棒の数値は「高群」の％を表している。

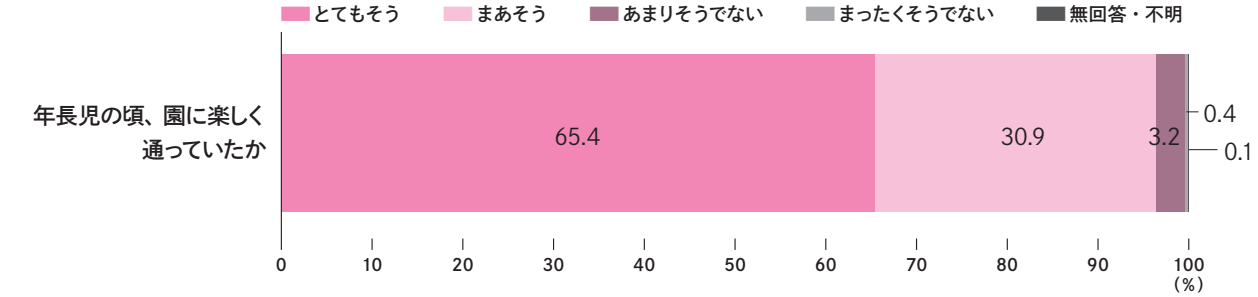
4も2（P18参照）のグラフに関連して、保育者のかかわりが、保護者にどのような影響を与えるかを見たグラフです。保護者の入学前の子どもに対する5つのかかわり（P17表参照）ごとに、保育者による子育て支援との関連を示しています。

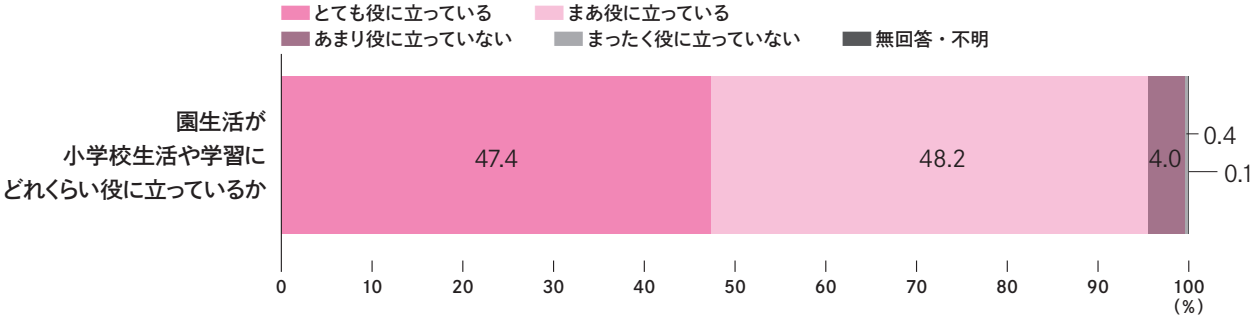
子育て支援が充実しており、「とても気軽に子育て相談ができていた」と感じる保護者は、子どもへの5つのかかわりすべてについて、「よくしていた」にあたる「高群」の割合が高い結果となっています。ここでも子育て支援の程度の差に着目すると、「とても気軽に子育て相談ができていた」と「気軽に子育て相談ができていなかった」の差がもっとも大きいのは、「主体性・粘り強さ・思考力」に関するかかわりで、約15ポイントでした。

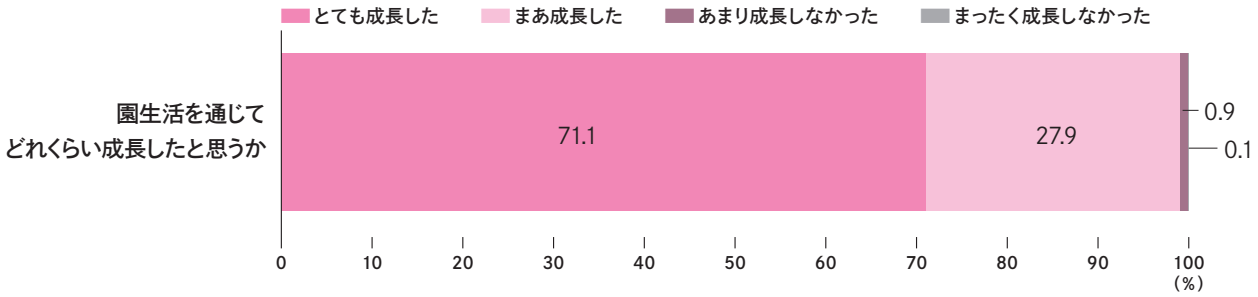
保育者による子育て支援は、保護者を通じて、その先にいる子どもへもよい影響を与えることがわかりました。園が行う子育て支援には、大きな意味や役割があるのです。

5 保護者の園への評価

楽しさ、役立ち度、子どもの成長への実感のすべてで保護者は園生活への満足度が高い







5 の 3 つのグラフは、園に対する保護者の総合的な評価と捉えることができます。

いずれも「とても」と「まあ」を合計すると 95％を超え、特に「園生活を通じてどれくらい成長したと思うか」は 100％に近い数値です。小学 1 年生の保護者が子どもの入学前を振り返ると、年長児の頃は大半の子どもが楽しく園に通い、園生活が小学校での生活や学習に役立っていると感じ、それらを通して子どもが成長したことを保護者が実感しているということがわかります。

まとめ

1 ～ 5 でご紹介したグラフが示す結果から、改めて園の果たす役割の重要性がわかりました。保育者の働きかけは、子どもへの直接的な形はもちろんのこと、保護者を介した間接的な形としても子どもの成長を支えています。そして、そうした子どもの姿を通して、保護者は楽しさ、役立ち度、子どもの成長への実感のすべての面で、園に対する高い満足感を得ています。

現在行っている子どもや保護者へのさまざまな働きかけが、小学校以降の子どもの成長に確かにつながっていく――。各園の先生方においては、このことをよりいっそう意識して保育を行っていくことが大切ではないでしょうか。

Benesse

表紙／裏表紙
東京都 ● 東一の江幼稚園

『これからの幼児教育』刊行に寄せて

ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

8PE001-H

これからの幼児教育 2018 春
2018年4月3日発行 編集発行人 岡田晴奈 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
©Benesse Corporation 2018